



プレスリリース

館蔵 青磁名品展

—翠・碧・青—

2013年10月5日（土）～12月23日（月祝）

画像③



画像④



画像①



画像②



TOGURI MUSEUM OF ART
法人 トグリ美術館



展覽会概要

青緑色の美しい釉薬で覆われたうつわ「青磁」が完成したのは、後漢時代頃（AD25～220年）の中国においてです。青磁の生産は長い間、中国の独壇場でしたが、10世紀ごろになってその技術が朝鮮半島に伝わり、高麗青磁が誕生し、線刻や象嵌などの装飾を伴うものへと発展していきます。さらに朝鮮時代の15～16世紀頃には粉青沙器と呼ばれる青磁の技術をもとにした白いやきものも作られました。

日本では朝鮮半島からの技術移入を経て、17世紀初頭に国産磁器・伊万里焼の生産が始まります。その中で青磁も作られるようになり、染付を組み合わせた日本独特の新しい装飾の青磁を生み出しました。そして伊万里焼の技法をもとに献上用へと昇華させて作られた鍋島焼において、日本の青磁は美の頂点を極めました。

今展示では伊万里焼・鍋島焼の青磁を中心に、中国・朝鮮半島の青磁も併せて、当館所蔵の青磁の名品を展示いたします。同じ「青磁」でありながらそれぞれの作品で異なる色、そして青磁に映えるそれぞれの装飾にご注目ください。（約80点展示予定）

■中国の青磁



戸栗美術館の中国青磁の展示は5年ぶりのことです。青磁のはじまり越州窯、宋代青磁のさきがけ・耀州窯、元明時代の青磁の主役・龍泉窯の青磁5点を出展予定！

表紙 画像①

青磁 瓶 龍泉窯 元時代（14世紀） 高27.6cm
玉壺春（ぎょっこしゅん）と通称する下ぶくれの形の瓶に、緑味を帯びた青磁釉がかかる。貼り付けや彫りなど一切の装飾を排除したところに一種の気品が感じられる。
芸州浅野家旧蔵。



青磁 獅子

越州窯

西晋時代（3～4世紀）

高9.1cm



青磁 蓮牡丹文 獅子鋤蓋水注

耀州窯

北宋～金時代（12世紀）

通高13.1cm

■朝鮮半島の青磁



表紙 画像②

青磁象嵌 蒲柳水禽文 鉢

高麗時代 (1269/1329 年)

高 8.5 cm 口径 18.5 × 18.9 cm

内側面には柳や葦、水鳥を、外側面には蓮弁文と菊唐草文を象嵌(ぞうがん)の技法で描いた碗。見込(みこみ) 中心に干支銘「己巳」があるが、生産期間が比較的長いため、このタイプの作品が13世紀後半の作と見るか14世紀前半の作と見るか、見解の一一致はみていない。

朝鮮半島では中国の青磁の影響をうけつつも、彫り文様や象嵌などで独自性を発揮。優美な高麗青磁を作り上げました。白いやきものが主流となる朝鮮時代にも青磁の技法を引き継いだ粉青沙器が作られました。



粉青沙器鉄絵 魚文 俵壺

朝鮮時代 (15~16 世紀) 高 19.5 cm

■日本の青磁

◆伊万里



表紙 画像③

青磁銹釉 貼付梅花文 盆台

伊万里（波佐見）

江戸時代 (17世紀前期) 高 6.7 cm 口径 4.9 cm
盆受け部分を竹茎に見立て、脇には竹葉と梅枝を貼り付けた盆台。全体に青磁釉、口縁と竹葉には銹釉を掛け、梅などは白く残している。精緻な細工、青磁釉の発色の良さなどから波佐見（長崎県）の三股古窯で作られたものと考えられる。

17世紀前半の初期伊万里の時代、伊万里焼生産の中心地・有田（佐賀県）よりもむしろ隣接する波佐見（長崎県）の方が美しい釉調の青磁を生産していました。

波佐見・平戸の製品も含め伊万里青磁の展開をご紹介します。



青磁染付 朝顔文 葉形三足皿

伊万里 江戸時代 (17世紀後半)

高 5.8 cm 口径 22.2 cm

◆鍋島



表紙 画像④

青磁染付 雪輪文 皿 鍋島

江戸時代（17世紀末～18世紀初） 高5.7cm 口径20.2cm

上品な青磁釉を背景に、鍋島焼ならではの構成力に富んだ配置で雪輪文様を浮かび上がらせている。染付の輪郭線と青磁釉が穏やかに溶け合い、染付のぼかしが画面を引き締める効果をあげている。裏文様は三方に花唐草、高台は櫛目文。

将军や幕府高官への献上用として作られた鍋島焼には、青磁釉の良い原料が採集できることから大川内山に窯を築いたという通説があるほど。

青磁染付のデザインセンスや、花瓶や香炉、人形などの立体造形の細工の細かさに目が奪われます。



青磁 松葉形皿

鍋島 江戸時代（17世紀末～18世紀初）

口径10.1×17.5cm



青磁 桔梗口双耳瓶

鍋島 江戸時代（18世紀）

高28.1cm

※なお、概要の要約が必要な場合は以下の文章をご参照ください。

■ 20 word

伊万里焼・鍋島焼を中心に館蔵の青磁を展示。

■ 150 word

中国で誕生した青磁は、朝鮮半島をへて日本にその製法が伝わりました。国産磁器・伊万里焼の中で作られた日本の青磁は、独自の装飾・青磁染付を生み出します。そして伊万里焼の技術を昇華して作られた鍋島焼では日本の青磁の美の頂点を極めました。今展示では伊万里焼・鍋島焼を中心に中国・朝鮮の青磁も併せて展示します。



広報用写真

本プレスリリース掲載の画像①～④の作品写真データ等をご用意しております。ご掲載の際は、別紙の写真借用申請書裏面の注意事項をご覧の上、申請書をお送り下さい。なお、作品画像はすべて戸栗美術館所蔵品です。



展示解説

展示期間中、第2週・第4週の水曜日と土曜日に、当館学芸員による展示解説を行ないます。予約は不要です。入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください。

■**第2・第4水曜 午後2時～** (10月9・23日、11月13・27日、12月11日)

■**第2・第4土曜 午前11時～** (10月12・26日、11月9・23日、12月14日)

※各回、約40分～50分ほどの解説になります。

※団体でご来館のお客様への展示解説も承っております。電話による事前予約制。

お気軽にご連絡くださいませ。(電話：03-3465-0070)



外国語展示解説（中国語・英語）

展示期間中、第2週・第3週の木曜日に、当館学芸員による外国語の展示解説を行ないます。参加ご希望の方は事前にお申込み下さい。

■**中国語 第2木曜 午後2時～** (10月10日、11月14日、12月12日)

■**英語 第3木曜 午後2時～** (10月17日、11月21日、12月19日)

※ご希望により隨時外国語ミュージアムツアーを承りますので、お問い合わせ下さい。



メモリアルデー

10/14（月祝）は創設者故戸栗亨メモリアルデーとし、終日入館料無料と致します。



戸栗美術館 概要

戸栗美術館は、当館創設者・戸栗亨が長年に渡り蒐集しました陶磁器を中心とする美術品を永久的に保存し、広く公開することを目的として、1987年11月に、旧鍋島藩屋敷跡にあたる渋谷区松濤の地に開館しました。コレクションは伊万里、鍋島などの肥前磁器および中国・朝鮮などの東洋陶磁が主体となっており、日本でも数少ない陶磁器専門の美術館として活動しています。



【会場】戸栗美術館

【開館時間】10:00～17:00（入館受付は16:30まで）

【休館日】月曜日

※月祝の場合は開館、翌日休館のため、10月14日・11月4日・12月23日（月祝）は開館、10月15日、11月5日（火）は休館。

【入館料】一般 1,000円／高大生 700円／小中生 400円

（団体20名様以上で200円割引）

【交通】渋谷駅ハチ公口より徒歩15分

京王井の頭線 神泉駅北口より徒歩10分

※当館には駐車場・駐輪場はございません。



次回展覧会のご案内

『鍋島焼と図案帳展』

2014年1月7日（火）～3月30日（日）

鍋島家に伝來した鍋島焼の図案帳と鍋島焼をご紹介。



■展覧会に関するお問い合わせ

公益財団法人戸栗美術館

広報担当宛て

〒150-0046 東京都渋谷区松濤1-11-3

TEL: 03-3465-0070 FAX: 03-3467-9813

URL: <http://www.toguri-museum.or.jp/>

E-mail: kouhou@toguri-museum.or.jp